国立公文書館
National Archives of Japan

292

詩枕名寄　巻第三十一

山陽部上

紅葉山文庫

儲磨郡

印南篇　日笠浦　藤江浦　可古鴻

幸荷島　野中清水　清水里

雜篇

明石　餝磨　室浦　伊保湊

家鴻　欵鴻　屎鴻　生鴻

津田細江　永瀬濱　惡濱　朝香浮

二見浦　高浮　木綿崎　楯濟

出濟　比治奇瀑　響　武志安氣迫門
夢濟河　木庭　高砂　青山
活道山　絶等寺山　石鎚山　幡広岡府
船坂山

家集

六帖
読人知　条伝山

万十二

六帖

河

尾花さきみだれたる松乃むらぎり　赤門院
いなみ野の秋乃地紅葉ま盛
とゝろ〳〵ゝゝとつきわる　家持
みまさかぐめのまゝ山いなみ野の
いなくさゝにたゝ
明日従者（アスヨリハ）将行（イナン）ノ乃河之出去者（カハノイデイナトミルヒハ）留吾者（トヽヒワヤ）也将（アラン）
いなみ河いなやさにひたん
なりにく世ゝもゝ
いなみ河石のさなりてゆの

萬三

海

名細寸稲見乃海之奥津浪
千重尓隠奴山縣島根者　人麿

右下総国附海路作歌二首内

萬六

わさもりいるみの浦廻乃
ちかはまをふくてうみかぜ　長皇子

懷中

鴻

いつくにかわれはやすらへいるやまま
こもいたるらい母をもとめさ

白鳥浦

萬七

儀茅

隣麿國

印南篇　野何海の

不欲見野乃、儀茅押靡左宿夜之
氣長在者家之小篠生　赤人

月七

月月

家にてはれいこんを市南野の
あさちはうへる野一月哉

月九

秋

はなれはて秋にやこんと稲見野の
はなさきにけり

右一首大納言藤原朝臣

作歌

月十

伊なみ野乃あさちはかりにあれと

さゝ波わけ行ふねのあとの白浪

右天平勝寶六年正月七日　天皇太上
天皇大后在東常宮南大殿時

播磨國守安宿王奏哥

かりの人のうつす廉のいなみ野を
あきてのこゝろあらまし氣　法人家

をうゝ鶴やとせいるみ乃　結宣

いなといふもををきめや

住吉の岸れ松をきけつれて　浦相

面白あるゝもいるみのいきし

いるみ野や山もゝ花くゝ世を

万七

ほ古
鹿

拾古
高市

同七
越人任吉野

鈴古八

万七

下東野ゆきあまるふ

ひろさの浦よ波ゝ乃ゆ

あまつゝよ時ゝ神もわ通ゝ

月見の浦をゝてゝ　題季

城百

藤江浦　或藤井　岸

荒磯藤江の浦爾鈴す釣　白水郎

等香將見　藤を吾平　人麿

一本　自磯乃藤江の浦乃伊射利乃流

八隅知し吾大王乃神隨高所知流榜

見野乃大海乃原笑荒妙藤井乃浦

水鵜釣等海人舟敎動　温燭宇人

万三

同六

曾古波尓有浦子吉募字信毛鈎有
為濱辛吉募諸毛惱燒蠟往素川覽
毋知師清白濱　赤人

反歌

奥津波へ波立りきいまりすと
荒江のうらふ舟こそ
かもめ鳴ぬれ
夜ふけぬ月乃まやけき　顕仲

夕なぎの荒江のうれいつる海
もくきけるちふあまのこめも　元皇円大臣

吹風と荒江の浦を見るさせば

月

彩十六

彩十六
時月

波八末毛清の浦のあり磯ら後れ
ゐもめ鳴荒江の浦乃鳥を
あれとも波も見をみもり　隆祐

歌仙三

序

むさ紀の荒江のうれ松ゝ
よせくゝ波そゝ
可古島　拾遺愚草院

万三

稲月野毛去遊勝尓思有者
心悪敷可古島所見　人九

拾八
祭　物

かこ舟乃松ゝこゝに鳴たり乃
あかなゝ人なゝ　讀人不知

後拾十八　月

かこはまはたてうふこわるせて
ありはの月はこれをなくれる　左京兆
あきはまつるかりうなくらかこの海
はるかにくもるやうらん　行能

幸荷島

陸路乃野鴨毛過伊奈美嬬幸荷乃
島之島際従吾宅乎見者吉山乃　上下異

右過幸荷島時山部宿禰赤人作

反歌

むらかりかりはれ海ありすす
水鳥もあれやあれたてうん

月

後拾四

うらわたかりうの海よおもしろ
あまもみあるあの月夜のは　雅経

月十七

野中清水

いはしの乃野中はたるかりはきと
かりの仙をたるる人そうる　後人家

月十二

後十

我をはいはしあるやなりあるん
野中の清水みまきれて　月

詞八

はるかにの野中はたるかりに
きくむ抽をたるるりきり　月
海くうう仙のうをたるくあく
野中の清れわきれわいるる　付実

千載

すむへきおもかけてゆくたの
野中のあまきまつむすひつる　摂津

同

影こそゆくる人はあとたえて
野中の清水はれわたるらん　二条

続拾遺

むすひ見し野中の清水かはらねは
我かけをもやおもひいつらん　西行

続古十八

人こそあれもとの心そかよひゆく
野中の志みつわれならはこそ　按察使

同十九

忘られぬもとの心はありなから
野中の清水かけそたえにし　俊成女

同

うけとて人のとふといにしへの
野中の清水見へはむすはん　教雅

続拾三

をのつから野中の清水すむ人も
わするゝかたにしのふ夜すま　信実

同十五

かよひこし野中の清水かけたえて
くまねとしもまた袖はぬれける　守覚法親王

新拾九

下はなほもとの心をたのみても
野中の清水みくさのみ通ハ　前僧正公宝

同十七

くむ人は又いつかはとたのめとも
野中の清水おもひこそやれ　寂蓮

一字抄　女房花

立よらんかけたになきを野へし
野中の清水むすひあへすも　仲実

二条院讃岐

思ひきや

ひとり世中のはてとたつねきて
さらに神をまつもあるかな　後成

夢ぬけき野中ばかりもとくるる
ちいくさとふの風を行く　後鳥羽

くまてこそ神の中乃れもとうるめ
うをとれとうもるる　信実

もみちそ野中の清水ひてうる
わりさこそ世もつくを　同

清水里　又在信乃国

良心

おりそりて清水の里よ住めれて
ふるとい知ふまきわてうれ　常陸

雜篇

明石

拾十四

浦濱　浮瀛　波泊

我宿ハたゝ海ちかきあまれそ
あしもとてとる人のゆくらん　後人名

拾十九

打ぬつるこのこのうやいるるん
こよひあしの月をとるも　中納言資綱

右一首情景の所在を云ふ事ちかゆあ

右平安故信乃赤入ふ
反ふれて知やをやをやをして
清水のさとてをみつきあへ　大進

此所亦可入信乃拾遺有便所也

よまれそて月のあるを夜中文雲
雲のそてをりくとうん也 紀貫之

在浦

次広あり浜のなかちかまと
あゆをこそしまたりをこそ 光後

万三

古九

浦

見渡者明石之浦乎焼火乃
保爾曽出流妹乎憑人 門部王

右在難波見潮又燭光作青
ほのくとあれらの網手りに
海人とれ月みとうかりの 人丸

拾八 松東

月

波をのこしてうらもとうん

海人憑

月

波はとうらもとうかまに

おもしもをのうらく 人丸

接拾九 月

あるのうれをさけく

こをこのあをとをとうん 紀式部

月

物井をとうらのやうくとれを 仲麻呂大臣

おくのくもひうもり

全三

月新のきにもをてゆくをの

月

海やこもりをうん 藤原宇之 朝臣

月もあり山うるみ

波たちうちよせんとしつ　平忠盛朝臣

浦風に波やはたちむすぶらん

たちのあとの紅の花　顕季

月けさは明石のうら波こさゆをハ

千鳥　直房

ふきとをしを明石の浦の風は

月

さよふけぬ山ぢ　仲教

ちくくとなきわたるなり　西行法師

彩古五

波のまくらにくるくるなく

月十七

海人の舟とまりをうつる風は

いくあしの月をうつれ　信歌

彩勅十

波まもる明石のうらをこぐ舟の

なみの音ばかりこそ　基俊

月廿旋ヒ号　源大

つれもなき月ぞ　信歌

あきれいたくもれ姫伊勢

続拾十二

もれ月をあはれ浦とやく海の

きりのうちのかん　源右種

続古四

いるれば波まのせきやをもる月の

ありあけをうむしん　忠良

月

うちわたれ月ぞ浦みちの

月十

なまもとくき秋はの月ぞ　宗蓮

舟とまりのあれあり明の

鹿

浦ちかくなれしゆしかの音　信成

続拾二　春月

こゑかはりぬらんは去乃月　ありしれうらしもまたはもする　左源経信

山乃はも見えぬありれ浦ちかき

詠合生田杜

誘はれゆく月またく明の里　末はとやなみすむ明石の浦をわく　読人不知

いく田のもりのとよそにしられ　後撰

朝日かけありしのうられ塩られは

拾六　海產布

こゝろありしかほとあまの袖にも　家

まつかひのありし浦乃うらみの

同　螢

よるのほたるハあまもさきめす　信実

濱

万七

吾舟者明且石之潮爾榜泊牟（ワカフネハアカシノミナトニコキハテン）

奥方莫放狭夜深去来（オキヘナサカリサヨフケニケリ）

六帖

わすれいわくたけきありれ濱ちゝら

みちあきくたちくちちぬつて也

千五百

みな月ハ月に浦ちまつはさしくて

ありのなみまつりぞする宮　五忠

湊

万六

明方潮干乃ころとありそまゆは（アカシカタシホヒ）

さゝかれしをん藤ちぞ久かそれ　赤人

新古十六

ありしかなきなき人の袖をさぞよ

まくらなる月もやうりのくい　実綱

明石なるあまのくるまにうちつけて　月新り
ものうきなけき秋の秋の月　光俊

新勅四
桂縄

あらしふきまれる雲のうすもの
ちりそうくるる嶺の秋月　順徳院

鎌倉六

千五百

明石なる海人のもしほこそ
焼くれゆくあまの袖にしぬ　為信

鎌倉一

あらしのかぜにまかせてこそ
くもをのうへの月の宿　後鳥羽

円四

なみ井よりいやひかこあり
ちりをうつくしめる月の影　信実

円五

明石なるもしほ汐をうねきく
こしいも月は神わすれつつ　為家

円六

あらしの浪のうちやかたん
うちつけ器の秋風　摂政院

新拾六

あらし浮月乃てやうちわむ
をの面のうちふちちとわる　後成

千四

瀧

なるあやうをれそうのもの
あらのたきまのうち月を　後恵法師

建保百五

もは大乃あられ神の反かも
明るたきの秋の夕ぐれ　定家

永生すらあしの奥に寄られて
ちまうこれあるさ月をうるか　業平朝臣

万三　碧

渡

天離夷之長道従恋来者
自明門傷島所見　人麿

金三

我こうい的石のせとに根ねせめ
わすれ草なまやとう月うか　公実

千五

まくこめて的石のせをを搖出れい
ちうまをうまをうれ寄　後鳥羽院

廉

彩物二九

夕ちうまあしれ門ゆ見うせい
大和ちまひを物う月うか　常盤井入道

万三

留火之明大門乎入日哉榜将別
家當不見　人丸

月さゆあしれせうに色ゆい
ちうのうへよたくむちう波　雲

寄れうふあしのをに入ようり
うの松風をうよちうも　清浦

泊

二ちうきうをいいそ分ちう
いく和あしのとまりうも

金八

餝磨　口河浦市里

いとせめて色うさはんちう波なう

朝七

ちはやふるかみのいせのうちまきは　陸人家

ちはやぶるかみのいせのうちまきは　ちはやぶるかみのいせのうちまきは

人をこひしとやまとなるらむ　為家卿

日八

我恋はあのうめそうまきりたれ

ちはやのうちまきはなをもとはれも　為家道経

ちはやのうちまきはなをもとはれも

ちはやぶるかみのいせのうちまきは　俊成

ちはやぶるかみのいせのうちまきは

あいうめくそうまきりたれ

最勝四天王院屏風

いかにしてかはやまもらきはやはれや　為経

いかにしてかはやまもらきはやはれや

ちはやぶるかみのいせのうちまきは　佐実

ちはやぶるかみのいせのうちまきは

いかにかあるらむこそめはやはれ

彩六

藍畠

万七

江

ちはやぶるかみのいせのうちまきは　天はるよ

日数の浦よりはるかみゆ

月十五

河

わたつ海のうちまきはなをいそのうまの河

たちかはるかはやまめ

鵜飼川ちくさのうちまきはなれ　坂上憲院

ちはやぶれ月乃海よりかはなれ

水上にうちまきはなをちはやぶる川　隆祐

海ちはやぶるかはやはうちまきはなれ

水上にまきはなれうちまきはなをちはやぶる河

浦

海よりくらきあさけゆふして　中務卿親王

春かすみ志賀の浦をこめつれは
ほのかにみゆるやあまの釣舟　友千　公実

右堀河百首善通本高岡浦云々
異本如此仍載之

千五百

市

ふるさとの志賀の浦わの市民の
たえぬ出すひまかたやみえん　後成

うちよせてともつらしとありし世は
志賀の市に人になれ

建保百

月

われぬれはさ月の霧をとこめて
志賀の浦わにいつるさく人　定家

志賀のうら志賀の都のさひしきに
昔の代にかへりけり月のよ　家隆

君か代は志賀の浦の月をみても
かゝるたまきしあやかりのかゝり　後京極師

右一首在国法師日吉社歌合ニ有之
前文を読てまけ侍りきていひ侍り
さりけるとなん

堀河百

里

付師国

たちなる志賀の浦のみたれあれとて

新六

あいそをうつ浦半月うる　豊昌

ちゆまたうちたれ里よりをあの月　元益四太良

いかり場しのあるようつき

百十二

室浦

付鳴海

宮ノ浦之瀬門之濤有鳴島く　泊

塩越浦今所法可学

むろの浦ちかいのうれさよみち

たちさ海たけてせとかるうり　中務卿親王

宮ノ浦のせとれたやみ波よて

かさはようる風乃もしき　佐実

山のたたてうせる春の宮のうふ

新六

唐日社参会

海のうをもとうれ人　元益四太良

ちをさしも　資隆

泊

芝助法師家五十七

ちはちよ家とまりのあき風よ

しちをちよあけく物ら毎人　大江親重

伊保湊　演

新作

ちさ和よ行きめてをけの情広ら　大江秀

いかのみをよりたくうり

れもさうものうきなみち

いかのうれをよりて山くなり

現六

ゆはやいかの浦みを海ちとて
やうちされせねみ月毎の月　登蓮法

家鴻

百十五

あさかすきうかれてとせんと　ゆみ人も
ひきしらかしの乃　うきいゆきを
とし海を　やはみしね　上下裏
家し海をみなとをたれ海原を
わたこのうらいまあさくな

右一を遠新羅使ハ回東筑紫海路
入京到播磨國家鴻ゝ時作哥

五首内

うへをうつ　此家し海の山さくら
さくらあくこみ乃とまりうらの山　家鴻

歌島

うきの海乃さはをとをれて
みちのりはしらきこゆる　鴻

屍島

むら人いのちをさきをれて
この海をもとをる海乃ん　同

生鴻

懐中

あさゆふを定をさ世をなもく乃い
いきし海をとをうれ

万六 篇十

津田細江　乃家ヲ新田津細江ト書ス

風吹有浪可將立跡伺候爾
都多乃細江尓浦隠往　赤人

右過幸荷島時作歌

万六

六月無い津さの乃江は蓮葉
乃しをれもかりそめ乃ふし　光國卿

万六

おきつ波津田乃入江の浦うれ
風もわたるやと久乃海人　知家

沖津風吹のの江乃ま津さ波
かさねるものはうみ乃ふ

永瀬濱

名寸隅乃船瀬從所見淡路島松帆
乃浦爾朝名藝尓　上野　笠金村

交歌

一

約乃ふもおやなきもまれ
ふれをの濱ゆ出ぬ舟
右神亀三年九月十日幸於播磨國
印南野時作哥

懐中

慈濱

人ふれぬ山ぬ乃ふ
なけうらみ乃濱

松原

孫子内親王
家会

いふさんあいうしてはるまも
さらうをまきらう立の松を

朝香浦

万六

明方潟平乃通手従明日者
下咲異六家附者　赤人

右今案紀貫之點明石浦亦入之

同うを

あさりかつさらいのゆきはまつ
うきをうの花の多をおりやも

新六

あきをたうきをうの花のいをきを
人うをとれは多をれて　知家

実派百

夕汐のゆをいをれはあきのかを

万十一

さをしかのゆをまををかをを過　同

往而見而来憑敷朝香方
山越置代宿不勝鴨

新百十二

二見浦　但馬　伊勢　有同名

あけをる紀をこのをにをる汐乃
袖のをわをく松をの海人　実方

里

むををををる見のをとを和の浦を
あをの海の月と出をの月をる　成実法師

右書写をまをしてをりをる二月八の
里とをの歌をそをよをある

高陽

拾遺

物思ふとゆきてもいたらたのあまのとまやいとやしるむ　読人志

右幡磨国よりあるをとりあはせ

ちきあるをもちて作るを京よりの

まてひきうまきてかのうたなる作

名人なりいつらしもとをん

本綿濟

懐中

神のまきうしくとにたきたてて

うけてういのるゆめたの会

楯濟

出濟

新古

きみ陸奥そきれりうたれ乃

みなこれしるもあられりけり　藤原四条

比治奇潮

万十七

昨日うあかいせりうきれとり

ひちさちちきをきみこつうも　読人志

ちまちさちうきれるのあみる

万代

心まちのもれよりかそう　長方

うう人のうやいきこもゆめん

家集

むさしのゝをはなれぬ月夜の比 中務卿親王
よりあけ行かきのをとゆゑ
さくはこれらのたえずぬるか 恵孝
ありさまかきのたえまこそなけれ
みやこの人のきてをとるまて 同

右散木集にかゝりけるに藤
渡といふ所にてよんでけるに追風吹
きんとを日もまつたりしとて返しけれは

貴見集

ふたゝびとしめてすきすてり渡ちる
ひきのたえまこときくいきまとり
右いまの國よりいつくまでもおきこそれぬ

月

のりのふるとみん
すてをいつくさけなきまよひ出身 貴見
浪乃上すゝきまりまうみだれ
おもきはいよのうみなれは
ひさご乃たるき此浪をふるま

武志 安氣遁门 正字可作

新勅十九
浪よるさむしおきの世とに河原乃 後京極 摂政
しもくもりせよみさらちる風

続古十
うきあら河も袖にうきわの秋さま 雅經
月そみる山出あけの世と
雲ゐ路むしおもれせとの松風

たえぬ杉うき世にかへる
なのりせむおもの世とやらぬは
川ちかき波もよるしらき法 俊成
これをまれ枕月のおもかけも
むかしおもの松の風はさそふ 隆祐
むかしのきまれのかげのうらみそ
こやこのよるもまたれけむ 平定嗣

右一首継おちてそうけ給むかしおも
とは夜のなさき寺の種にかけたらん
風あらきむかしのせとれ夕やよ
夜よひうきは夜まの真人 後京極摂政

右文永八年七月廿日白河殿にて人々
結ひさくりて三百六十首つかうまつりける
探題の歌をよませ給ひける

磯

舟とむる山もとあきの磯は松の風
たつゆふなみのよるかゝるらん

夢浮河

うつゝにきゝてもいさしらなまゝ
ゆめとは河のなかれてもあらん 後入道

木庭

をやまきぬなきうの露にかはれても

さうはとまつぬ物とをもふ　後歌

わうをてもあるとなをしたるる

ゆめまぢかをはなをかすん　宗長

右一て懐中国者の夢婦河をけるる

そとうん

高砂

山岸屋　雄甫　濱陵　序

古七

後をまちつる人はまちんをうきこの乃

おもひもしれぬ友なれるふ　雄甫

拾七

れをけとあつる砂をはしるよ

なりくしをひとりみくるん　後人家

月十二

乃松をみるとみとを

月

をまれ名をまつ人はまつ人はなりなり月

うあ乃乃をまつ人はいつまでくく

かうあ名をきはなのまむ月

清ゝ乃松をたうさう宮ゝ

蓬をき時乃者ゝをまれ月

名をれいあるのゝ高砂の

まつはをてゝ乃へりける　雄甫

月十八

ゝつゝ世にあ物中なきこれ

松もまれをあゝ　雄甫

ゝ乃よりうゝたりゝ

月十五

あこの人ゝ世はゝん　後人家

拾九
むかしより世はつきせぬは高砂の
松のふるえもふりまさりけり　貫之

家集
高砂乃志かなく秋のあらしにハ
かのこゑうふ波そよりける　忠見

中務集
高砂乃松ハみなれとも霜うきよ
ましれるちるをたち人ふみき

信明集
をの山麻乃ちらぬ時しくあらなくも
春たちきことゝきまりなる

貫之集
ほつえおのまゝなかなる高砂乃
松やこゝ世乃ちてをこそらん

堀百
霞もたつ見わたせは山嵐ふきなり

高砂へハいまからうへき　隆源

新古七
高砂乃松もむかしに成ぬへし
なほゆくすゑハ秋の夜の月　寂蓮

新勅十三
忘れなよとれをいかんたのめきの
まつもいかにそ心よはりけり　雅経

続後五
高砂の外にも秋ハあるものを
わかゆふくれと鹿そなくなり　定家

続古一
波よせて年月日かはれときくさこれ
松乃みとりハかはらさりけり　順徳院

続拾一
はるかに絶えさえしかよ高砂の
松よのこして霞かゝる雲　円

雜四

月八

月十六

彩板二

月六

建保二年百

うゑおけし松のあるしをたれか
月はあるをあるしをたれか　程邦成長
冬きくに雪はらはれたるこそ
はるをまちていとかめる　乃家
うゑおけの松もうゑをもも
あるれなはきのちる人をん　光定
春風いとくもなくこの
松のまつすゑにあるみ　平兼盛
春ちかくうゑおけし
雪はこもりあるをこの松　藤原信実朝臣
うれあり春をまちをこれ

うゑみのうへの松はれかしか　定家
こぬ春をいとつきをこの
鹿のつまとふまつのをちこち　拾遺愚賢　資平
右拾句こてこさたのさ
うゑおけの松はうゑおけみちさへ
なほあるまつまる春はれしか　知家
奥風はまもるかをもこそ
いさうゑおけの松のおもはは　後拾
山
うゑおけの山の山のはたのへに
うゑおけの松をたれか　乃家

彩去　雜去

鹿のなく高山乃本こゝ誠
ふるのゝこすゑ乃
高砂の山たかくやこゝ乃
あきたこゝ乃ゆふ霧の
こゝ月乃数をもこゝ
つゆ乃ちりけるさこの山　一条内大臣

峯

俊四　みこゝ乃ゆふ乃ふたゝこゝ
こゝ乃松風ゆふ
高砂のこゝ乃
ゆふ人こゝ乃

賀之集　孟浦

俊十　高砂のこゝ乃ゆふ霧かけて
人乃こゝ乃をたのこゝ乃ゆふ　清人卿

尾上

古四　松風の絶さこゝ乃高砂の
たのゝ乃尾上いはやなくらん　紀行

歌庫

月十七　かくして世をやたくさん高砂の
松のゝよゝ乃ゆふ　清人卿

俊十四　清水の流れ寄こゝ乃高砂の
尾上乃小松まこゝ乃ゆふ　源唐明朝臣

拾三　松風のこゝ乃ゆふ
尾上の鹿乃なこゝ乃ゆふ　清人卿

拾遺
鶴

高砂乃松とはいつるをくれて
なのへは雪やをれまさるらむ　元輔

同八

尾上路の松のまをもとをくらるるき
波のをとをよそうの風とやきける　光孝

右一首天暦御時歌合に屏風

よろせ松をくれてくもこそ給
たかの高砂をとはまし

同十八

我のみやこのうらをそうさこと乃
みのをよりてるはもこそ　後人家

順集

うらもなき波とはの人乃松の給と
ふるさとやいはまなるらむ

元真集

高砂乃尾上の松ををりつるさえ
鹿のこゑやうとくなるらむ

五歳集

月

月新うきの梅きこゑ乃の
松のへ乃藤のの花やちるらん

後拾一

梅産

高砂のの松乃色は梅さえをり
外山はりを見しるすもあるうん　巨房

同

鹿の鳴り松をちるれる梅の
尾上の松のみちるれも　涼

同

松いなば月乃ちるれと言梅は
尾上乃雪もつまるうつ　猶節

同十七

我のこと思ひしるさこ乃

おのへ乃松もまさたてるかな　左京兼定

長拾九

言葉とたくれいそむしし

尾上のまつへもまりそうらき　除相方　羽左

右一首六条右大臣家歌合

の四よろしきかの松のかりて

こいをうさこそんいとたえいな

なれいろいあるやさきん　後情広

言葉の尾上れ松をさしれる

ちよ成ちよよ鹿のなくん　仲実

塔百

高砂乃松の色れ梅され花ハ

千一

未をこそかるおきつ波　賀茂成保

月六　鐘

たくさこれ尾上のの松乃をすも也

月土

あらさけて哀やをくらん　匡房

言葉乃井のへ松れ松りあく風の

をたのやいまくやうへき　厨

月日

ゝ風の哀ゝ乃尾ゝ孫ゝ梅れ

千ゝ百歌

尾上乃松ゝ松をさたくり　秀能

言葉れ井のへ乃梅よいつとても

月　四歌

松ををゝ哀ゝ風なゝねゝも　通具

時哀ゝ哀ゝもかゝぬゝ梅の

月　花

尾上の松ゝ松をせゝあく　有家

言葉乃雲のみをゝもまゝふまて

彩勅一　水鶴

たのへの乃風よ花をちりけり　清成女

言葉乃尾上せれさくらあきい

こゝこれみてきいくへくそこぬ　武内訳

月

春もすゑらいとうしたりきての

みのへ乃さくらをちりの　前関白

言葉のたの色せ花よ去られて

月二

のこりし松乃まちひしりる　信実朝臣

雲風の野ふくまゝふたりきこ乃

月

おのつよきゆゝ花せりてや　長方

言葉のみのつよ見ゆゝ去せもの　源有長

これもつもたゝく人をこひつ

続拾三　友

たのへ乃松よかゝる友ちみ　荻野廣氏

言葉乃尾上せれ色やきしてん

月五　禊野水

ちゝ里の水よ廣うなくゝ　清輔

続古三　白雨

松風もたゝくなりぬる夜の

みのへのやせれゆゝちのそ　中務卿宮

月九

つゝる我身もゝ高所せ　純因

たの色ちゝ松花ちん

続拾　雅経

ちゝう外ちゝうちきこの

尾上のさくゝ雲ちゝ

言葉のみのへの松乃夕しれ

月十一

新拾一　雪

同二

同院摂政家百首

家持集

なりもいそぬらしいかれども　世阿弥
こゑ砧のたのしのめはもとをぬれや　詠
たえぬ音のつゆ　松のこゑ　式部門院御歌
山風にこゑもしてあけたるさこの
みねのしらくもいまさらのこゑ　山院御歌
こゑ砧の尾上乃雲れ朝ぐもみ　左大臣
ふれしらくこれまさきもり　信実
こゑ砧のみねのゆふれる　中務卿親王
松の風ぬりもの月のさやけき
秋風に花ちるたにかさぬたうさこの
尾上の萩乃ちらまくをしも

家持卿百首
院集

春やこゑ川こゑの浪やをうさこれ
尾上より三〇の松ゑ　花宗
こゑ砧の松いつれ春みのへより
をの上ぬ春ゑ乃春　宗家

蘆里

堀百　新拾二
こゑ砧の梅りもれさこ山ぬ
尾上乃さこ雪ゑこゑ　耳仲

浦

松ゑ乃ゑ乃もれもゑ春これ
こゑ砧ぬ松の夕ゑ　桂ヶ谷殿歌

万代

たらぬまくこそやこの分の濱ちどり
あとをとめてと世をなげくなる　恵心

湊

一字妙　郭公

言ぬ世の名はたくはれなくこそ
こゝろみなとめる船のそめん　法人名

岸

民部卿修房家三会

まつとせをきぬ逢ことを
まつとこゝろ分のさき　為家

青山

万三　六帖

あを山のうゑもとめてもとめてもつゆ
つゆとまれるもの哉　湯原王

同六

辛荷乃島之　島際従　吾宅乎見者
青山乃曾許十方不見白雲毛千重不
成来沼許彼多武流浦乃畫往隠浦
乃濤く隅毛不墨憶曽吾妹容乃
氣長孫　上異

赤人

同七　旋頭歌

右過辛荷島時作

垣越犬呂越鳥
鳥馬安君
鵜為公青山葉茂山

人丸

万十六抵

吉山乃佐宿本此花ハいろも色
ちりまさりなん人なりは
吉山とあるようそれをのつる

新六 小那木

みつのきハ花咲よりもり　信実
あを山乃そらにたなびき白雲を
ながめてなりてそそらん　道念法師

万三

法道山

法道山本立し紅葉尓咲花毛移尓家里
世間者　上下畧　家持

反歌

波之吉可皇子之命乃御里我歌此

見し法道乃路波荒尓鶏里

右天平十六年春二月安積皇子薨
し時三月二十四日作歌

月六

一松幾代可歴流吹風乃聲之清者
年深香同　市原王

右同年正月十一月登法道岡集
一株松下歌二首

月九

絶等寸山

ゆくさの山此峯上乃さくら花
さきんまさんとは思はんん

右右河内大夫遷任上京時播磨娘子

贈歌二首内

名欲山　成和日奈保利山成和日奈与山

万九

明らかいわまさかうんれ名欲山

二

右石上乙麻呂

同

右藤井連遷任上京時同娘子歌

今年志麻（イマトシシマ）　可敷名欲山（カシナヤマ）

石踏平之（イシフミナラシ）　復赤毛来武（マタアカケコム）

右藤井連和歌

備磨国府

忠見集

誰をかもふわらなりかくらん

右備磨のこふやもりのよかく

とをれるけいかるとん

歌坂山

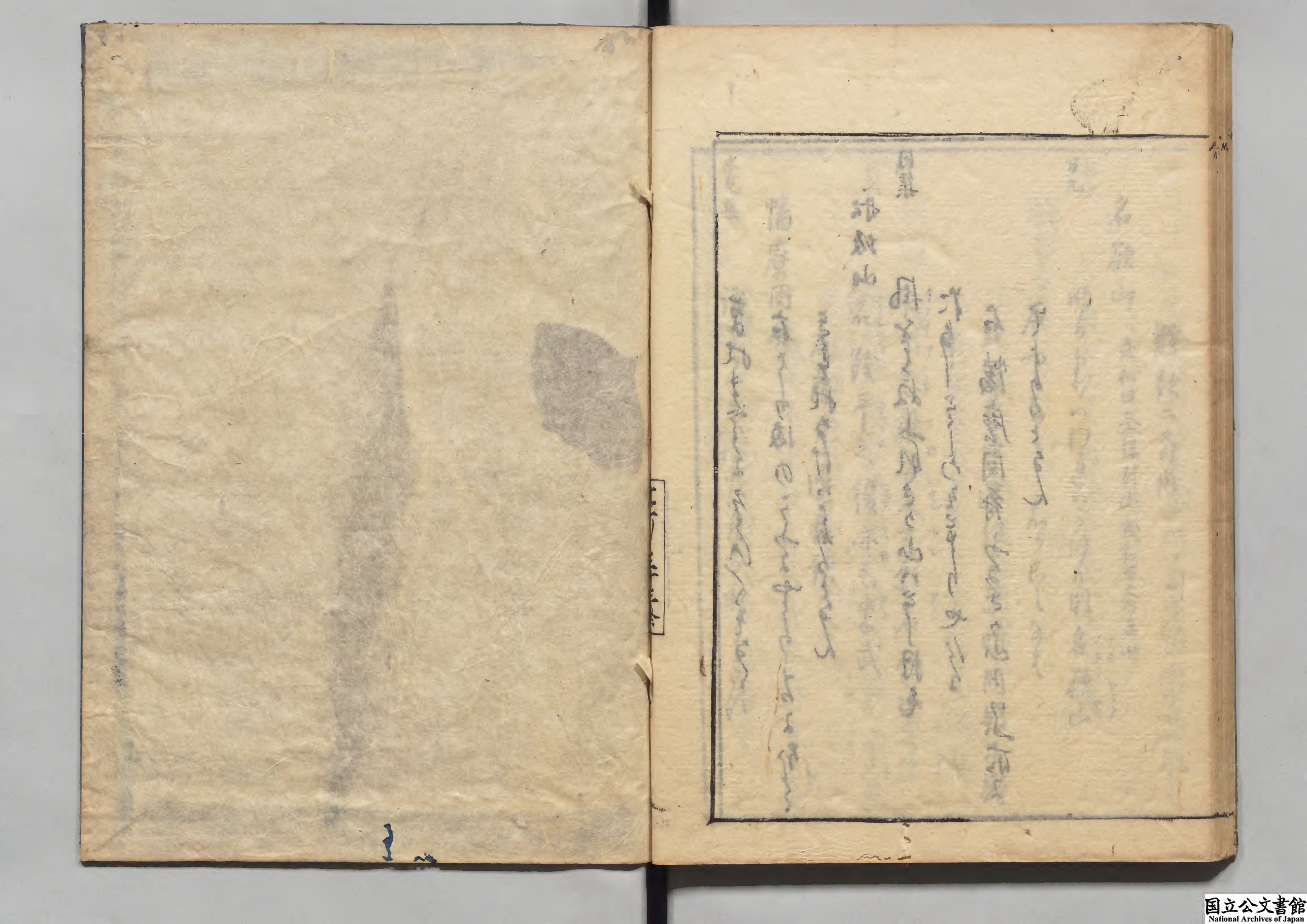
月集

風をそれふれさか山いかに月を

たのまるらんとやもりの也ける

右備磨国府ふるさか山とふ所を

てよめるとん



国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan